



War Cry

6月号

福音版
2026
June
No.2907

二〇二六年 六月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

救いをもたらす名

佐々木 昭夫



現在、私は高齢となり、高齢者のための施設で生活しています。ある日の夜半、居室の入口近くでめまいを起こして倒れ、ドアに手をかけて起き上がろうとしているところに、施設の職員がかけつけて、起こしていただいたことがありました。不幸中の幸いとも言えるべきことで、救われた思いがいたしました。

私たちは、テレビや新聞等のニュースに、災害や争い事の被災者、被害者の様子を知って気の毒に思い、何とか助けたいと思っても、諸種の事情でできないもどかしさを覚えることがあります。時には対岸の火事を見るようにしてすぐに忘れてしまうなど、心もとない自分を見いだします。

ところで、人生の危機に直面して、何とか切り抜けようとしてできず、絶望のどん底に陥る時、それまで信仰に関わりをもたない人が、恥も外聞もなく「助けとなるなら何にでもすがら」という思いにかられるものです。そのような時こそ、名誉や地位、財産などは当てにならないことを知るのです。栄華を極めた豊臣秀吉も、「露と落ち露と消えにし我が身かな浪速のことは夢のまた夢」

と辞世を残しています。そこで人生の危機に際して「救われるべき道」を示している聖書の言葉を紹介いたします。

「いかに幸いなことが神に逆らう者の計らいに従って歩まず 罪ある者の道にとどまらず 傲慢な者と共に座らず 主の教えを愛し その教えを昼も夜も口ずさむ人。」
(詩編1編1、2節)

これに反し「神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻」(詩編1編4節)ともあります。この世のはかない夢を追うのではなく、主なる神を畏れ敬い、その教えである聖書の御言葉に従う幸いな道を歩みたいものです。

私の青年時代の経験を述べさせていただきます。田舎町から上京して印刷工場に就職し、休みの日の午後に神田の古書店をぶらついていました。街頭テレビジョンの前で多くの人々に加わり、見終わったところ、すぐ近くの救世軍での集會案内があり、誘われるままに小隊(教会にあたる)に入って賛美歌やメッセージを聞きました。話の内容はほとんど忘れましたが、その中

で、人生の機微にふれた短歌が印象に残ったことは覚えていています。

それまでの私は、自分の境遇を嘆く消極的な生き方で、どうしたらそのような生き方から積極的になれるかと迷っておりました。集會の終わりに、導かれるまま前に進み、恵の座という祈りの場所で、心の中にある罪の悔い改めの祈りを献げたところ、言いようのない喜びを覚ええました。イエス・キリストが「悲しむ人々は幸いです、その人たちは慰められる」(マタイによる福音書5章4節)とおっしゃいました。まさにそれとおりのです。その日、新しく友となった人々の励ましを受け取って帰ったのでした。

それはまさに慰められ、新しい出発をした、救いの道に入った経験でした。

聖書は、「わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名(イエス・キリスト)のほか、人間には与えられていないのです」と述べています。私がお勧めしますのは、皆様が聖書の御言葉により、「救われる道」へ入られることでもあります。

(救世軍士官(伝道者))

神様が備えてくださった 機会を通して

石田 征慈 さん

(救世軍泉尾小隊所属)



青年時代の様々な経験は、かけがえのない人生の財産となります。大阪の泉尾小隊に属している石田さんに、信仰の歩みをお聞きしました。

はじめに

私は大阪市にある救世軍の泉尾小隊(教会にあたる)の兵士(信徒)です。小隊では、子どもの頃から親しんできたピアノを用いて伴奏の奉仕をし、小隊のブラスバンドでは楽隊員としてコルネットの演奏をしています。私は二〇二四年六月から一年間、オーストラリアに滞在し、現地の救世軍の小隊に出席しました。その

時から今年にかけて、三つの創造的芸術のキャンプにも参加し、音楽的にも霊的にも成長する機会が与えられました。同時に、文化を超えたクリスチャンの交わりの中で、豊かな恵みを受けています。

今回、『ときのこえ』に証言を書く機会を与えられ感謝しています。私はまだまだ信仰の歩みを始めたばかりです。私のこの不定形で未完成な信仰は、一直線

に説明できるようなものはありません。それでも今、神様を信じて歩み続けていられるのは、何気なく受け入れてきたこれまでの経験に、神様が後から少しづつ意味を示してくださったからです。そのため、時間をさかのぼる形で、自分の歩みありのままに記します。

NCAC 2026——自分らしく信仰を歩むこと

今年一月にオーストラリアの救世軍で開催されたNCAC*1に参加しました。キャンプでは、『Metamorphosis』(メタモルフォシス)をテーマに、六日間を過ごし



2026年のNCACで



2025年8月TMIで親しくなった友人たちと

ました。メタモルフォシスとは、幼虫が蝶に、オタマジャクシが蛙になる形態変化を意味します。参加者はそれぞれ二つのグループを選び、技術を磨きながら、毎日の集会や小グループでの時間を通して霊的な学びを深めていきました。このキャンプは、私にとって「信仰の歩み」に改めて向き合うきっかけとなりました。

最初の集会では、旧約聖書のエゼキエル書四七章「命の水」からメッセージがなされました。この箇所には、神殿の祭壇から流れ出る水が、くるぶしほどの高さから始まり、進むにつれて次第に深くなっていく様子が描かれています。説教者は、この深まっていく水を信仰の歩みに重ね合わせ、キャンプのテーマである「形態変化」と結びつけながら、より深い

ところへ進むように参加者を促しました。私自身も、まだ浅いところにとどまっていた

「あなたがたのうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい。」(ヘブライ人への手紙 3章13節)

TMIを通して、毎日聖書に触れ、祈り、神様との時間を意識的につくること

私がこの時参加していたバンドの指揮をされていた方に、バンドメンバーとしての奉仕のあり方について相談すると、「毎日聖書を読んでいなくても、クリスチャンだと言うことはできる。それは本当にクリスチャンと言えるだろうか? バンドも同じで、毎日練習していなくても、バンドマンだとは言える。でも、それは本当にバンドマンなんだろうか?」と、クリスチャンとしてもコルネット奏者としても胸に刺さる言葉を受けました。

「あなたがたのうちだれ一人、罪に惑わされてかたくなにならないように、『今日』という日のうちに、日々励まし合いなさい。」(ヘブライ人への手紙 3章13節)



2025年5月キャンパウエル小隊で。ユースグループの送別パーティ（中央の黒いTシャツが筆者）

の大切さを学びました。生活の中で神様とつながっている時間が増えていくほど、信仰もまた深められていくのだと実感しています。

メルボルン滞在——生活の中で神様とつながること

そのような意味で振り返ると、二〇二四年六月から昨年五月までの一年間滞在了たオーストラリア・メルボルンでの経験は、生活の中で神様とつながっている時間が長く、私にとって信仰が深められていくことを強く感じる期間でした。

メルボルンで出席していたキャンパウエル小隊では、日曜日午前の聖別会だけでなく、ユースナイト、若者向けのワークショップ集会、食事と聖書の学びを共にする

コミュニティ、バンド練習など、多くの集まりにメンバーの一人として迎えていただきました。また、キャンパウエル小隊の信徒の方がホームステイ先として受け入れてくださったことも大きなお恵みでした。

オーストラリアに行くという決断は、それまでの生活の中で、思うようにいかないことが増えていったことがきっかけでした。それらと向き合いたいという思いはありながら、同じ環境で向き合い続けることに、限界を感じていました。当時は、「環境を変える」という選択は自分自身の決断で、自分の力でつかみ取った機会なのだと思います。

しかし、オーストラリア滞在中、二〇二五年のNCAのワークショップの集会の中で、気づかされたことがありました。この経験もまた、神様が備えてくださった機会であり、すべて神様の計画の中にあり、与えられるべきタイミングがあったのだということです。そして、自分の意思で来たと思っていたメルボルンでの生活も、実は神様の招きがあったのだと思います。

「わたしは主の御声を聞いた。『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。』」（イザヤ書6章8節）

オーストラリア渡航前後

正直に言うと、メルボルンへ行く前の私は、聖書を読むことや祈ることをそれほど身近なものとして受け止めていませんでした。バンドや伴奏の奉仕、また兵士としての歩みも、祈りの中で真剣に取り組んできたと言えるかどうか、今と違っては自信がありません。

どこかで、「そういうものだから」と深く考えず、自分にとって都合のよい形で、受け身のまま関わってきたようにも思います。

今改めて、賛美のための楽器の練習に取り組み、自分の信仰生活について考えると、「なんであの時、真面目に向き合ってたこなかったんや」と落ち込んでしまうこともあります。「願ひ求めても、与えられないのは、自分

の楽しみのために使おうと、間違った動機で願ひ求めるからです。」（ヤコブの手紙4章3節）
本当に刺さる御言葉です。それでも、NCAを通じて学んだように、今の自分の信仰と過去の歩みとを比べて非難し続けることを、神様は望まれないだろうと思います。

オーストラリアで出席していたキャンパウエル小隊は、オーストラリアでも最大規模の小隊の一つです。一方、私が所属している泉尾小隊は、日本の中でも比較的小さな小隊です。日本に帰る前は、この規模の違いに動揺してしまうのではないかと少し心配していました。ところが、実際に聖別会に参加してみると、不思議なほど安心感がありました。懐かしさを覚えるとともに、規模の違いも超えて共通している「主に献げ



2005年 祖父母と姉と。心斎橋で社会鍋

る賛美」に、改めて心を打たれました。
メルボルンから戻り、泉尾小隊の聖別会で覚えた安らぎも、これまで何気なく積み重ねてきた時間が、実は自分にとってかけがえのないものだったからこそ与えられたものなのだと感じています。

自身のルーツ

私の母方の祖父母はとても熱心なクリスチャンでした。祖父の南勝榮は特に、昔ながらの「ザ・救世軍人」というような存在だったと思います。母も生まれた時から泉尾小隊に出席し、結婚前は泉尾小隊の日曜学校教師として奉仕し、名古屋小

隊に住んでいた頃は名古屋小隊で兵士として歩み、現在泉尾小隊で会館軍曹として忠実に仕えています。
祖父は私が十歳の時に亡くなったため、救世軍人としての姿はあまり覚えていません。それでも、泉尾小隊では今も祖父の思い出が語られ、その信仰は一つの遺産として受け継がれています。



2025年10月 泉尾小隊の召天者記念会で家族と

*1 National Creative Arts Camp（全国創造的芸術活動キャンプ）。オーストラリアの救世軍が主催する音楽キャンプ。動画制作・演劇・朗読詩・写真など、音楽に限らず多様なコースを選択でき、創造・芸術活動を通じて神様とのつながりを育むことを目的としている。
*2 Territorial Music Institute（軍国音楽キャンプ）。米国南部地域の救世軍主催の音楽キャンプ。多様な芸術活動のコースを選択し学ぶことができる。

小隊には、それぞれの世代によってつくられ、受け継がれてきた独自の雰囲気、文化、歴史、そして信仰の歩みがあります。その積み重ねの上に、今の私の信仰があるのだと確信しています。これからも、泉尾小隊というこのローカルな小隊の中で、受け継がれてきた信仰の一部として、自分らしく奉仕を続けていきたいと願っています。

創立者 ウィリアム・ブース 大將 リンドン・バッキンガム (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 西村 保 (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈日本〉 ●東京地区冬季街頭給食

救世軍では、社会鍋募金へのご献金により、昨年末から今年2月まで冬季街頭給食をおこないました。東京地区で2025年12月に実施した街頭給食の利用者は880人、今年1、2月の利用者数は3,540人となりました。新たに始まった救世軍スーププロジェクトの協力で調理した弁当を配布しました。昨年度より利用者が増加しており、2026年度にはさらに食糧に困窮しておられる方々の利用が予想されます。多くの方々のご協力とお祈りに感謝いたします。

●首都圏イースターへの参加

4月12日(日)、午後3時30分より東京・新大久保のウェスレアン・ホーリネス教団淀橋教会でおこなわれた超教派の「第63回首都圏イースターのつどい」に救世軍も参加しました。オープニングでは救世軍ジャパン・スタッフ・バンド(JSB)の演奏に合わせタンバリン隊が操練をし、その後、JSBはホルネット・ソロ「キリストにはかえられま

せん」を演奏。また、淀橋教会インマヌエル聖歌隊と共に賛美を献げました。音楽ゲストのヴェッセル・ゴスペル・クワイヤの皆さんによる特別賛美があり、高木康俊牧師(連根バプテスト教会)がヨハネによる福音書11章25～27節より「よみがえりの人生」と題しメッセージをしました。集会の様子は、CGNTV(キリスト教放送局)のYouTubeチャンネルで視聴できます。(首都圏イースター実行委員会報告・参加者268人)



〈国際本部〉カンタベリー大主教就任式に出席

2026年3月25日、カンタベリー大聖堂で、サラ・ムラリー氏の第106



代カンタベリー大主教就任式がおこなわれ、英国国教会の500年近い歴史上初めて、最高位に女性が就任しました。就任式には約2,000人が参列し、BBCの配信を通して世界中で視聴されました。救世軍からは、ロンドンの国際本部からジェーン・パオーネ中將(教会一致運動担当)はじめ4人の代表者が出席しました。就任式に先立ち、ムラリー大主教はロンドンのセント・ポール大聖堂からカンタベリー大聖堂までの巡礼をおこない、人々と交流し、対話しました。看護師出身で、ロンドン初の女性主教であった彼女のリーダーシップは、他者への思いやりとキリストへの揺るぎない献身に根ざしています。

就任式では、英国王からの正式な任命状が読み上げられ、任命が承認されました。ムラリー大主教は説教の中で、クリスチャンと指導者たちに「すべての人々の幸福を求める」よう呼びかけ、「私たちはすべての人々のためにここにいます」と述べました。式の翌日、救世軍の代表者は他教派の代表団と共に大主教と面会しました。救世軍は、世界的なキリスト教共同体の一員として、分断された世界において神の約束を信じ、希望をもって人々に奉仕するという使命を共有しています。



救世軍とは? What is the Salvation Army?

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本では1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)たちが来日して救世軍の働きが始まりました。聖書のメッセージを伝えるとともに、^{はいしやう}廃娼運動や結核療養所の設立など、その時代のニーズ^{こた}に^{こた}える活動をおこない、現在も小隊(教会にあたる)、社会福祉施設、病院で、聖書を土台とし他者に仕える働きが続けられています。2026年5月1日より、日本での救世軍の司令官として西村保大佐が、軍国女性部会長として西村和江大佐が就任しました。



西村大佐夫妻

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ (子ども向け紙面)

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます! 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください!



救世軍公報 ときのごえ
発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日
定 価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振 替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 西村 保
編集人 平本 祐子
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのごえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。